

「みるく世がやゆら」

2015年06月30日

沖縄県立与勝高校3年生の知念捷さんは、戦後70年の節目となる「慰霊の日」に自作の詩を朗読した。心打たれたので、全詩を転載したい。

みるく世（ゆ）がやゆら（平和でしょうか）／平和を願った 古の琉球人が詠んだ琉歌が 私へ訴える／「戦世や濟まち みるく世ややがて 嘆くなよ臣下 命ど宝」（戦いの世は終わった／平和な弥勒世がやがて来る／嘆くなよ、おまえたち、命こそ宝）／70年前のあの日と同じように／今年もまたせみの鳴き声が梅雨の終りを告げる／70年目の慰霊の日／大地の恵みを受け 大きく育ったクワディーサー（モモタマノの木。平和の礎の周りにも植えられ、広い葉が大きな緑陰を作る）の木々の間を／夏至南風の 湿った潮風が吹き抜ける／せみの声は微かに 風の中へと消えてゆく／クワディーサーの木々に触れせみの声に耳を澄ます／みるく世がやゆら／「今は平和でしょうか」と 私は風に問う

花を愛し 踊りを愛し 私を孫のように愛してくれた 祖父の姉／戦後70年 再婚をせず戦争未亡人として生き抜いた 祖父の姉／90歳を超え 彼女の体は折れ曲がり ベッドへと横臥する／1945年 沖縄戦 彼女は愛する夫を失った／一人 妻と乳飲み子を残し 22歳の若い死／南部の戦跡へと 礎へと／夫の足跡を 夫のぬくもりを 求め探しまわった／彼女のもとには 戦死を報せる紙一枚／亀甲墓に納められた骨壺には 彼女が拾った小さな石

戦後70年を前にして 彼女は認知症を患った／愛する夫のことを 若い夫婦の幸せを奪った あの戦争を／すべての記憶が 漆黒の闇へと消えゆくのを前にして 彼女は歌う／愛する夫と戦争の記憶を呼び止めるかのように／あなたが笑ってお戻りになれることをお待ちしていますと／軍人節の歌に込め 何十回 何百回と／次第に途切れ途切れになる 彼女の歌声／無慈悲にも自然の摂理は 彼女の記憶を風の中へと消してゆく／70年の時を経て 彼女の哀しみが 刻まれた頬を涙がつたう／蒼天に飛び立つ鳩を 平和の象徴というのなら／彼女が戦争の惨めさと 戦争の風化の現状を 私へ物語る

みるく世がやゆら 彼女の夫の名が 24万もの犠牲者の名が／刻まれた礎に 私は問う／みるく世がやゆら／頭上を飛び交う戦闘機 クワディーサーの葉のたゆたい／6月23日の世界に 私は問う／みるく世がやゆら／戦争の恐ろしさを知らぬ私に 私は問う／気が重い 一層 戦争のことは風に流してしまいたい／しかし忘れてはならぬ 彼女の記憶を 戦争の惨めさを／伝えねばならぬ 彼女の哀しさを 平和の尊さを

みるく世がやゆら／せみよ 大きく鳴け 思うがままに／クワディーサーよ 大きく育て 燦々と注ぐ光を浴びて／古のあの琉歌よ 時を超え今 世界中を駆け巡れ／今は平和で これからも平和であり続けるために／みるく世がやゆら／潮風に吹かれ 私は彼女の記憶を心に留める／みるく世の素晴らしさを 未来へと繋ぐ

素晴らしい歌ではないか。若い知念さんの鋭く、深い感性に感嘆した。祖父の姉の哀しみを自分の哀しみとして受け止めて伝え、平和への篤い願望を歌っている。人は皆、心に優しさを持っている。その優しさ呼び起こし、共有できる世にしていきたい。

辺野古新基地反対のために「辺野古基金」を呼びかけている。当初の年間目標としていた3億5千万円を3ヶ月弱で突破した。全国から3万8千件が寄せられ、本土からはその7割であるという。沖縄県民の人口に比べ、本土は少ないのではないか。犠牲を負い続けている沖縄の痛みを少しでも共有しようではないか。